

トピックス

学会大会印象記

日本植物防疫協会 栃原比呂志
日本植物防疫協会研究所 高木一夫

日本植物病理学会大会に出席して

平成15年度大会は3月28日から3日間、交通の便がよい神田駿河台の明治大学で開催された。ほぼ隔年で開催されていた東京での大会が、全国一巡方式に変わったため8年ぶりの東京での大会になった。

ちょうど桜が咲き始め、天候に恵まれ、日に日に開花が進む中、会場は大学創立120周年記念館のリバティタワーで行われた。講演会場の広さ、内外の設備など申し分ない。また、五つの会場が近接して設けられていたので移動が便利であった。またスクリーンは見やすく、手元も明るくてメモが取りやすく、大会の運営も極めてスムーズで、準備が十分にされていたことがうかがえた。

大会参加者は約950名、一般講演は428題で、遺伝子レベルでの仕事が目立ち、研究のかなり重要な部分を担っているものや遺伝子操作が行われているものに限っても40%強を占めていた。配列や構造解析が多かった初期のころに比べ、病原性や抵抗性、代謝系、侵入、感染、移行、伝搬、毒素合成等などの発現や機能の解析、さらに単離や座乗領域の解析など、内容は年とともに多様になってきている。学会賞・学術奨励賞の6題も内容に遺伝子レベルでの解析がないのは1題だけであった。新病害の報告は近年草花が多く、今回は新病害17題のうち半数を超えていた。大会での新病害の報告は減少しており、部会や研究会で発表されることが多くなってい

る。

プログラムを見て、22名の共同研究による講演があることに驚き、共同研究者数の年次変化を過去にさかのぼって5年ごとの大会での共同研究者数の割合を調べてみた。表-1に示したように単独の発表が年とともに減少し、かわりに4~6名による共同研究が増加してきている。

新旧両会長は挨拶の中で、学会誌を国際誌に育てる努力をしてきたし、これからも国際的に高い評価が得られる学会誌に育てていきたいと強調され、また、会員がその努力をするよう求められていた。また、その一環として英文誌を年6号(和文誌は4号)とし、英文誌は国際誌を数多く手掛けているシュプリンガーフェアラーク東京(株)で印刷し、電子ジャーナルの利用もできるようになった。

懇親会の参加者は500名を超え盛会であった。来年度大会は3月28~30日、建設されて間もない福岡国際会議場で開催される。

応用動物昆虫学会に出席して

第47回大会(会期:2003年3月25日~3月27日)は全国から750余名の研究者・同好者が盛岡市に集まった。3月の盛岡とは思えない暖かな晴天が参加者を驚かせる幕開けとなった。ここ数年の傾向ではあるが、研究対象が農林害虫やその天敵に限らず、周辺環境に生息す

表-1 日植病大会一般講演の共同研究者数の割合(%)

講演数 共同発表者数	年度											
	'53	'58	'63	'68	'73	'78	'83	'88	'93	'98	'03	
1	129	165	163	190	242	250	290	278	302	448	428	
2	43	31	29	23	25	15	15	9	6	5	3	
3	54	58	61	60	55	64	60	50	46	42	31	
4	3	11	10	17	19	20	23	39	43	46	56	
5	0	0	0	1	0	1	1	1	5	7	9	
6	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	

The Impression on 2003 Annual Meetings of Society. By Hiroshi TOCHIHARA and Kazuo TAKAGI
(キーワード:日本植物病理学会,日本応用動物昆虫学会)



様々な生物に拡大し、農業を生態系の一部と見る傾向が強くなっている。寄生性天敵の生息地としての農耕地周辺環境の潜在力を扱った、神戸大学の前藤氏の発表には新鮮さを感じられた。また、研究手法についてい

ば、一時他の研究分野からの影響を強く受けて増加した塩基配列の解析は表題から姿を消し、分子遺伝学的手法が本来の研究手法として着実に活用されていることが印象的であった。研究発表で大学・研究機関の連携によるプロジェクトが増加しているのは好ましい傾向に思われたが、民間の研究者の発表が減少しているのは、経済界の事情を反映しているとはいえ寂しかった。植物防疫に直接関連した課題では、浸透性殺虫剤・施設農業での生物農薬・ウイルス病害のベクター対策・土着天敵に対する農薬の影響・水田のカメムシ防除対策などに関して、新しい多くの知見が得られていた。ただ、一般の生産者や消費者の関心を引くような研究表題がほとんど見られないのは残念なことであった。ともあれ450題以上のバラエティーに富んだ発表がそれぞれに実りを結ぶことを念じた次第である。学会の展示コーナーでは次回の国際昆虫学会の開催地であるオーストラリア（ブリスベン）が積極的な宣伝をしているのが目を引いた。

書評

天敵—生態と利用技術—

矢野栄二 著

A5版、296ページ 本体4,000円＋税

養賢堂（2003年3月10日）発行

本書には農業の現場に近い研究者に役立つ研究を中心に、カブリダニ類を含む天敵昆虫の生態と害虫防除への利用について基礎的な研究も加え網羅され整理、体系化されている。コナジラミ類、アザミウマ類、アブラムシ類、マメハモグリバエといった施設園芸での主要害虫の天敵を研究対象とした著者の経験に基づいた解説は、具体的で実感を伴っていて分かりやすい。そして、IPMの今後の展開といった、これからのすべきことやヒントも示されている。さらに、新たな研究の足掛かりになる引用文献は充実していて、大変有り難い。読後すぐ、私は本書に紹介された本3冊を発注してしまった。

本文は全8章から構成され、各章とも豊富な文献的正確な引用に基づき綺麗にまとめられ、それに著者の考え方や主張が織り込まれた力作である。第1章“天敵利用の基礎”では、天敵の生態学的な基礎知識やキーワードの解説がある。第2章“施設園芸における天敵利用の基礎知識”では、施設園芸における主要害虫と天敵の生態的特徴が要領よくまとめられている。そして、IPMの基幹技術として天敵の効果的な利用方法と普及の必要性を説き、最後に天敵の効果に影響する諸要因が整理され

ている。第3章“卵寄生蜂類の利用の基礎知識”では、チョウ目害虫の防除に利用される卵寄生蜂の生態と放飼効果について、第4章“放飼増強法における天敵利用技術の開発”では、天敵の大量増殖の基本を述べ、実際に行われている大量増殖の方法や有望な種や系統の選抜法、さらにシミュレーションモデルなどを基に、大量増殖した天敵の最適な利用戦略が解説されている。第5章“永続的利用”では、天敵の永続的利用を実施する過程を示しながら、作業の要点や注意事項が具体的に記されている。そして、ヤノネカイガラムシやクリタマバチ等の永続的利用の成功例から、成功要因が考察されている。第6章“土着天敵の保護利用”では、土着天敵の評価法、土着天敵の保護や働きを増強させる植生管理や選択的殺虫剤の利用について解説され、示唆に富む内容である。第7章“天敵利用の新技術”では、天敵利用の新技術として注目される情報化学物質の利用および天敵育種を取り上げ、第8章“導入天敵の環境への影響とその管理”では、天敵導入の負の側面である土着生物への影響に触れ、導入天敵がもたらすリスク管理について著者の考え方や欧米や我が国での導入規制が紹介されている。

繰り返し読んだが、天敵への新たな興味や想像が広がり、読んでいて楽しい。このような本を、日本語で読めることは幸運で、著者の長年に及ぶ努力の賜物であると思う。特に、天敵の研究や利用に携わる方は、ぜひ本書を読まれることお勧めする。

（永井一哉 岡山県農業総合センター農業試験場）